
レーゼの神

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レーゼの神

【Zコード】

Z2773Q

【作者名】

紅このは

【あらすじ】

見覚えのある死体を見下ろした千歳は自分が死んだのだと理解し、天国なり冥界なりへ行くべきだらうか、と考えた。

「地上に未練がないのは良い事ですが、まだ成仏しないでくださいね。私が来た意味がないですから」

突然そう言つたのは自称地球の神の得体のしれない青年、璃寛。成仏する方法もわからぬため彼について行くと、そこは“空の神殿”といふいわゆる天上とか天界と呼ばれる場所だった。

そこで会つたのは最高神シャモア。

「新しい神になつてほしい」

……はい？

「これは決定事項だ。君に拒否権はないよ」

突然レーゼと呼ばれる世界の神になつた青年の、世界を安定させるための旅が始まる。

「神々の箱庭」シリーズの記念すべき第一作目です。

登場人物（前書き）

隨時更新します。

登場人物

レーゼ
神

千歳
ちとせ

レー・ゼの神。神としての名はウイスター。略称ウイリア。神様顔負けの超絶美形。初対面の人には必ず女と間違えられるのと、どれだけ鍛えても筋肉がつかないのが悩み。が、鍛練の成果は出ているのでよくわからない体である。なぜか日焼けせず、健康的な白く美しい肌をしている。黒髪に銀の目。世界中の女性が羨む容姿だが、本人は迷惑している。元々体術はできたが、神になつて不老不死の体と様々な力を手に入れた。死んだ時点では十五歳なのに、神の体になつた時外見年齢が十八歳に代えられた。瞳の色も元々は灰色である。

璃覓
りかん

アーノスの神。神としての名はない。本人曰く“地球”は星の名で、正しくは“アーノス”。変身魔法が得意で、地球の神話に登場する神はほとんどコイツだつたりする。薄茶色の襟元ほどの長さの髪に、淡い空色の髪。常に笑顔を絶やさず掴み所のない腹黒。アイドル顔負けの美形なのに印象に残らないという、変わった人（神？）。外見年齢は十九歳。

シャモア

最高神。全ての世界を管理する。金髪金目。基本的に空の神殿がロア・ジエ

～ドラゴン～

エルム

白い鱗を持つ雌竜。ドラゴンの誇りを何よりも大切にし、子供思いの最強ママ。光属性。

クロム

黒い鱗を持つ雄竜。すっかりエルムの尻にしかれている。闇属性。

ラピス

真名はラピスラズリ。濃い青の鱗をした雌竜。転生者。水属性。

カーマイン

真名はクリムゾン。濃い赤の鱗をした雄竜。転生者。火属性。

〇〇・プロローグ（前書き）

誤字脱字の指摘、感想などは大歓迎です。
拙い文章ですが、よろしくお願いします。

〇〇・プロローグ

気が付けば、俺は自分を見下ろしていた。

崩れた壁や天井、倒れた棚やテレビなど様々な物が散乱している。そんな中で俺が見ているのは、青白い腕。顔は見えないのに、妙な確信があった。

あれは自分なのだと

。

おそらく、自分は死んだのだろう。震度七もありそうな大きな地震だった。古い建物だし、耐えられなかつたらしい。

死んだのならば天国なり冥界なりへ行くべきだと思うが、どうやつて行くのだろう。

「地上に未練がないのは良い事ですが、まだ成仏しないでくださいね。私が来た意味がないですから」

いきなりかけられた声に驚き、俺は顔を上げた。

薄茶色の髪に空色の瞳。俺よりも四歳ほど上だろうか。優しげな風貌だが、掴み所のない印象に感じた。特別引き付ける何かがあるわけではない。しかし、そこらのアイドルなど田じやないほど整っているのに印象に残らないような、変わった美青年であった。

「初めてまして、千歳さん。私の事は璃寛と呼んでください」

そう言って、璃寛は軽くお辞儀をする。

「ええーっと、璃寛さん? 状況がよくわからないのですが」

言いながら、俺の頭はフル回転していた。

なぜ、この人には靈体であるはずの自分が見えているのか。璃寛も“成仏するな”と言っていたし、自分が死んだのは間違いない。それに、何のために来たのだろうか。

璃寛は俺を見てくすりと笑った。

「まあ、混乱するのも無理ないです。私は地球の神をさせてもうつっています。だから、貴方が見えるのですよ」

「…………は? 神?」

思わず素で聞いてしまった。慌てて敬語に直す。

「あの…………どういたしまして」

その質問には答えず、璃寛はのんびりと言った。

「敬語はいいですよ。使いたいです」

確かに妙に使いにくいのだが、神というのが本当ならいいのだろうか。相手も敬語だし。

「私はこれが自然体ですから。神の前では嘘がつけないよ變成になつてゐるのですよ。演技もそうです」

なるほど。敬語は演技といつぱりではないが、自然体でもない。だから疲れるのか。

……とこゝか、さつきから何気に心読みますよね。

「嘘をつけなくとも人を偽る事はできますから、念のためですかいですか。

じゃあ、遠慮なく。

「俺に何の用?」

誰かと演技抜きで話すのは久しぶりだ。俺は無意識に手を細めた。

「色々と疲れていたようですね」

「まあ……ちょっとね」

曖昧に返したが、璃寛にはわかっているだろう。とはいえ、本題はそれではない。

「私達は……いつ言つて失礼ですが、貴方が死ぬのを待っていたんです」

「俺が死ぬのを？」

「氣分のいい話ではないが、意図的に殺さうとするよつせマシだ。

……してないよな？

「わからんしてませんよ。これからたくさん迷惑をかけるんですから」

何だろう。嫌な予感がする。死んでやっと解放されると思つてたのに、璃寛の顔が怖い。

「詳しい話は行つてからしましょ。あまり時間がないのです。さあ」「あ

差し出された手におずおずと手を伸ばし、触れた瞬間、俺達の体は跡形もなく消えたのだった。

小説や漫画、ゲームにはよくあるが、まさか自分が体験するとは夢にも思わなかつた瞬間移動に、俺は目を丸くした。

「神は全ての世界の能力を使えますからね」

と、璃寛が意味のわからない事を言つてゐる。

「（）」が我々の住む神殿です。天国とも天上とも天界とも呼ばれていますが、我々は“空の神殿”と呼んでいます

「それって古代語か何か？」

「はい。今はほとんど使われていませんが。地球でも大昔は使っていたんですよ。貴方もすぐ理解できるようになります」

意味深な笑みを浮かべる璃寛に、これ以上は聞かないでおけり、と俺は思った。

璃寛には筒抜けだが。

「さて、こんな所で立ち話も何ですし、行きましょうか。靈体では天界に一時間といられませんから、急ぎなのですよ」

ちなみに、下手に肉体を持つてゐる方が耐えられないのだと言つ。靈体は魂だけの存在であり、より神に近いから。俺が死ぬのを待つていたのは、ここへ連れて來るためだろ。

それでも、耐えられるのは一時間。

璃寛は長い廊下を歩き、大きな扉の前で立ち止まる。

装飾が少なく質素で、ただ大きいだけなのに異様な存在感を發揮しているそれを手も触れずに開けた。

中もやはり質素で、“偉い人のいる所”豪華な城”といふイメージは払拭された。

そういえば、“神殿”だと言っていた気がする。それでも意外な感じだ。

「連れて来ましたよー」

少々場違いな声を発した璃寛は、俺に入るよう促した。

「ああ、ありがと」

金の髪と瞳をした可愛らしい少年は、にっこりと笑った。年は十歳くらいだろうか。と思ったが、相手は神があるので全く当てにな

らない。

そう。彼こそが全世界における最高神であった。

俺は彼の圧倒的な力の気配に絶句した。

「君が千歳だよね」

「……そうだ」

我に返った俺が返すと、神は嬉しそうに笑った。

「僕はシャモアだ。君は普通に話してくれるんだね」

そう言われて敬語を使っていない事に気が付くが、神の前では使えないのではないのだろうか。

「そうじゃなくて、大抵の人は声が出なくなるんだよ

……威圧感で？

まあ、わからなくもない。俺だって、全く平氣といつわけではないのだ。多少の息苦しさはある。

「多少で済むのがすごいんだよ。まだ人間の魂なのに」

まだ？

「日本に生まれた君なら理解はできると思うけど、どんな生き物であれ死んだら魂だけの存在になる。今の君がその状態で、この時点

では肉体を持たない事以外生前と何ら変わりはない。マンガにある
ように、物をすり抜けたりもできないよ」

「マンガって……神様もマンガを読んだりするのだろうか。

「読むよ。あれ、おもしろいよね」

「へえ、意外。でもここは娯楽が少なそうだし、おかしくはないか。

……なんか神様と話してごるとしゃべる事を忘れそうだ。

「で、その魂達は“ライシン・ヴァルト・ノーズ始まりと終わりの地”つまり冥界へ行く。そこで魂をきれいにして、また別の生き物へ生まれ変わるんだ。
輪廻転生つてヤツだね」

「魂をきれいにするつて、記憶を消したりするのか？」

俺は変なクセがつかないよう、わざと声に出して言った。

「んー……まあ、正確には少し違うんだけど、そんなものかな。ただ、君は数少ない例外だよ」

「例外……？ “ライシン・ヴァルト・ノーズ始まりと終わりの地” とやらに行かなかつたからかな？」

「それもちよつと違うかな。僕達がここへ呼んだんだし」

呼んだって、璃寛が迎えに来た事か。

「ええ。普通なら、貴方達が会えるのは冥界の神くらいのものですよ。私達が特定の誰かに姿を見せる事など滅多にありません」

ふうん……。

「それで、俺に何の用？」

面倒事ならお断りだ。

「ふふ、君は面白いね。どうして僕らは個性的な人ばかりなのかなあ」

むう……よくわからん。

「ま、時間もそんなにないし、本題かな。君を呼んだ理由、それは仲間になつてほしいからだよ」

それは同志的な意味で？それとも……。

「神様になるつて事だよ」

はあ？ ものすこしふべ面倒事の臭いがふんふんするんですけど。

「まずは、神とは何かを説明しないとならないね」

無視ですか？

「貴方に拒否権はありませんから、悪しからず」

…………もつぱりひともなれ！

シャモアや璃寛の話では、神というのは生まれながらのものではないらしい。最高神であるシャモアと双子の弟である冥界の神は別だが。

よくある神話のように、世界は神が創っているわけではない。自然にできるのだそうだ。その管理をするのがシャモア。間違つて滅びる事のないようになると、監視のよつなものだ。

勘違いのないように言つが、神は万能ではない。生き物を滅ぼす事はできても、創る事はできない。世界及び生き物はあくまで自然に“生まれる”ものだ。もしかするとシャモアの上に神様みたいな生命体がいるのかもしれないが、少なくともシャモア達に死んだ者を生き返らせる事などできなかつた。

といつても、転生は別である。同じ生き物として生き返らせる事ができない、といつ意味だ。

ただ、世界はたくさんあって、シャモア一人では管理しきれなかつた。そのせいなのか、世界が荒れ始める。

そこで、荒れた世界を安定させるために別の管理者を創らなければならなかつた。

しかし、くどこようだが、シャモアに神を創る事などできない。

だから、既に生きている者を神として創り変える、という方法をとつた。それが璃寛のよつた各世界の神々である。

「……つてことは、璃寛は元々別世界の生き物?」

人間と言わなかつたのは、他の世界にはファンタジーに出てくるような生き物もいるのかもしぬないと思つたからだ。

「ええ。私はリアンデールといつ世界の人間です。普通はその世界から神を選ぶのですが、アーノスができた当初は動物なんていませんでしたから」

アーノス?

「地球の事ですよ。地球は星の名で、世界としては“アーノス”が正しいのです」

へえー。

「それで、君に担当してほしいのは“レーザ”といつ世界だ。でき

たのは“空の神殿”でいつと一十一年と半年、下界では九十年前だ
ね

「時間の流れが違うのか？」

「うん。世界によつてもね。アーノスはここと変わらないし
でも、九十年つて結構経つてるんじゃあ……？それとも、神様達
にしてみれば長くないのか？」

「どちらも正解。僕達にしてみれば大した事のない時間なんだけど、
やつぱり地上では長いみたいだね。九年もの間神がいなかつたか
ら、すぐ荒れてるんだよ。君が死ぬ原因になつた地震も、その影
響。他の世界にまで害が及ぶようになるなんて、末期だね」

いや、いや、いや……それかなりマズイだろ。

「そう言つけどね、いい加減な人を神様にするわけにはいかないで
しう？ここ九十年、マトモな生き物が生まれなかつたんだよね。
レーゼには。だから璃寛のように、他の世界からいい人を選んだわ
け」

えーと……それが俺？

シャモアはこりこりとうなづいた。

「もちろん。こんなに条件の合つ人はなかなかいない。何より無欲
などころがいいね」

面倒臭がりなだけだつて。

「わい、もうそろそろ時間がない。他に質問はある?」

俺は少し考えてから答えた。

「具体的に何をすればいいんだ?」

「うーん……何も? 神はいるだけで安定するんだ。ただ、レーゼの場合はあそこまでボロボロだと、他の対策も立てないといかないかもしれない。だからとりあえず、世界を見て回るのはどうかな。自分の世界がどういうところなのか、知つておるべきだしね。細かい事は璃寛や他の神に聞くといい」

璃寛が、腹に一物も二物もありそうなヤツだけど頼りに……って聞こえてるんだった。璃寛の含みのありそうな笑顔がかなり怖い。シャモアは目を逸らした。

「で、君の新しい体だけど、魂の記憶を基にして神のものに創り変えるよ。あくまで創りえるのであって、前と同じではない。当然外見は変わる。いくらか成長させて、目の色もえてみようか。使えなかつた力も使えるようになつて、いるはずだから、早く慣れるように頑張つてね」

「わかった」

俺が頷くのを見るとシャモアはスッと右手を上げ、俺の位置では聞き取れないほど小さな声で何かを呟いた。

01・空の神殿（後書き）

「」でお知りせ。

「レーゼの神」の設定については「神々の秘密」を「」ご覧ください。
なお、「神々の箱庭」シリーズでは「はちみつ色の姫」なども同時連載しております。

こちらが第一作ですので読まなければわからない、という事はあります
ませんが、関係のある話なので興味のある方はぜひ「」ご覧ください。

02・美形ゆえの悩み

「はああああああ

.....」

俺は思わずため息を漏らした。大仰に聞こえるだろうが、これは俺の本心だ。

死んだのは問題ない。むしろ清々しいだぐらーだ。

強制的に神になつたのも.....面倒だが百歩、いや一万歩ゆずつて良しとしよう。

だがこれは.....。

千歳という人物は、何というか神に愛されながらも不幸の塊のような少年だった。

.....“神に愛されながらも”ところのはあくまでたとえである。

彼は全てにおいてその才能を發揮し、運動、勉強共に年齢には不

釣り合いなほど優秀だった。

見た事、聞いた事を一瞬で覚え、応用力、実行力もある。何よりも優れているのは、その容姿。

千歳はシャモアや璃寛と同等、いや、それを大きく上回るほど之美しさを持っていた。

濡羽色の髪は艶やかで、まだ十五歳の子供だといふにどことなく色気を放っている。灰色の瞳は角度や光の加減によつて銀にも見え、その美しさを一層引き立てていた。真っ白な、しかし病的ではない真珠のような肌はどれだけ太陽の下に居ようとも、なぜか日焼けする事がない。女のように見える細い体は男らしくなりたくて鍛えても変わる事が無く、一見華奢なのに武道は超一流という異様な人物にできあがつてしまつたのである。

千歳は正直、世界中のはなかつた。見られないよりは幾分マシだが、それでも女と間違われて嬉しい訳がない。

千歳はノーマルだ。変な趣味は無い。

だというのに街行く男にナンパされ、女に同性のように扱われ、上を脱いで納得させるまで毎回苦労するのだ。髪が長いわけでもないのに！

何度坊主にしてやられたと思った事か。その度に全力で止められたが。

この顔のせいで彼女も、まともな友人ですらできた事はなかつた。

男は千歳の性別を知つていっても下心から寄つて来るし、女は千歳の容姿に劣等感を抱くらしい。

せめて男らしい美しさなら良かつたものを。

そつ。問題なのはその容姿。

俺にとつてどんな女よりも女っぽいこの顔！体！肌！唯一の救いは声がそれほど高くない事だらうか。……それでもアルトだが。

「怨む。本氣で怨むぞ、シャモア」

相手が最高神である事も忘れ、怒氣のこもった声で怨る。

俺は今、川に映る自分の姿を覗き込んでいた。

そこに映るのは十八ほどの青年……いや、女っぽぢりでも通るよう、判断に困る外見だ。

前よりは体の線も丸くないが、胸に何かつめれば女に見える。逆に言えば、胸がないからかうじて男に見える程度だ。喉仏が無い事や、髪が長くなっているのも原因の一つだらう。男にしては華奢

だが、女にしては胸がない。そんな感じだろうか。

灰色だった瞳はもう、完全な銀だった。よく見ると、金の線が何本か入っている。

何より。

なぜ！なぜ美貌に拍車がかかっているんだ！前でも十分規格外な顔だったのに！

身長も高くなつたし、十人中一人くらいは男に見てくれるだろう。きっと。だが、残りの八人はまず間違いなく女だと思つて接して来るに違ひない。

そういう意味でのため息だつた。

「ま、なつたもんは仕方ないか……。近寄りがたく感じてくれる事
を祈るとしよ」

とりあえず、現在地を確認しなければならない。どうやらこれは中らしいが、どの方角に町があるのかとか、そもそもこの世界がどういう世界なのか、俺は全く知らないのだ。

「あ、千歳さん？探しましたよ～。移動したでしょ！」

「あれ、璃寛? 何でここに…… そういや、『璃寛や他の神に聞け』って言つてたつけ。違う世界も自由に行き来できるのか?」

俺も行く事ができる、と。
ん? こういう事は「これから他の神が来る可能性があるのか。 そして

「……何を考えているのか大体想像できますが、貴方の場合は時差をきちんと考えてくださいね。私がここに一日いたところアーノスでは六時間しか経ちませんが、貴方はその逆なのですよ」

「ああ、そうか。で、何しに来たんだ？」

「……顔に出やすい人ですね。声に出して言ってください。貴方は神。私と同じくらい偉いのです。私が貴方の心を読む事はできません。できるとしたら、シャモア様と冥界の神くらいのものですよ」

「へえ。で、何か用？」

「読んでもらえないとか面倒だな。あ～、でもそれじゃあ隠し事できないのか。」

「何か用、つて……貴方のために来たんですよ。それとも、なんの知識もいらないのですか？神しか知らぬ事を教えて差し上げようと思つたのに。余計なお世話だと言うなら帰りましょう」

「あ～つー待つた！俺が悪かつたから教えてくれ！」

「教えてください、でしょ？」

「……教えてください、璃寛様！」

数分後、俺は心なしごつたりして机に座っていた。……いや、気のせいではない。疲れた。

璃寛は向かいの大きな机の上でのんびりとくつろいでいる。

といふか。

「なんか璃寛、 性格変わつてないか？」

「貴方が私と同格になつたからですよ。お互こに嘘はつけませんし、演技もできません」

「なるほどねえ」

「ひつちか素の璃寛だという事か。俺の勘、当たつてたな。絶対黒くてうタイプだと思つた。」

「千歳さん、今何考えました?」

「いや、何でもない」

「うわー、演技ができないってしんどいな。特に演技するのに慣れている俺からしたら。」

俺は昔から外見のせいで苦労した。

男子から告られる、女子に同性扱いされる（家事ができたのも理由の一つのかも）、痴漢なんて日常茶飯事だ。

「よく稀にだが、誘拐もあった。普通の人なら一生体験しないだろうに、俺は数年に一度の割合で被害にあったのだ。

俺欲しさに借金取りがない借金をでっち上げた事も……思い出しあくはないがあつたな。あと少しで売られるところだつた。

警察にはしおりお世話になつてたし、絶対顔覚えられてた。
「またお前か」って顔されるんだ……何も悪い事してないのに。

そんな訳で少しでもトラブルを減らすために、時と場合に応じて自分を作るのが当たり前になつていた。だから十五のわりに大人びてるなんて言われるようになつたんだな。

「神になれ」なんて言われて落ち着いていられるのも経験から。平和な日本に住んでいたのに、命のやり取りをした事も両手では足りないほどあるし。

レーザーでもこの顔のせいでトラブルのかねえ。

02・美形ゆえの悩み（後書き）

田 “空の神殿”『ロアード・ジョン』、&アーノスの一時間=レーゼの四

03・神とは（前書き）

別名“神についての説明”の回。

「……忌々しい顔だ」

俺の独り言に、璃寛がこちらを向いた。

「顔が気に入らないのですか？芸術と言つていいほど美しいの」「元

「色々あつてな」

俺は曖昧に返す。

「姿は違つように見せかける事ができますが……」

「本当か！？」

「ええ、まあ。神は基本、他の生き物には見えません。特に知性のある生き物は、その分欲が多いですからね。……ああ、今の貴方はまだ魂が体に馴染んでないので見えるはずですが、暫くすると見えなくなると思います。ですから、我々神は人前に出る時は姿が見えるようにしなくてはなりません。その過程で姿を変化させる術を変身魔法とります」

「……今の俺使えないし

馴染むまで」「元もるか？

よほど落ち込んで見えたのか、璃寛は苦笑して言った。

「あまり使わない方がいいですよ? アーノスみたいになります」

「地球みたいに」……?

「いやあ、若氣の至りと言いましょうか。アーノスができてすぐや人間が生まれた頃はよく遊びに行きましたねえ。姿を変えて。そうしたら、あちらこちらで“父なる神”“アシラー”“ヤハウ”など、色々な名前を貰つて……」

「は? もしかして、それ全部璃寛の事なのか? 宗教問題とか深刻なのに、その原因?」

「だから若氣の至りだと言つたでしょ? 今はしてませんよ」

今してなくても、それは問題だらう。過去も、そして現在進行形でたくさんの人人が死んでるのに。

本氣で神を信じている人達が聞いたらどう思つだらうか。

……俺は絶対やめとこ! うん。

「あれ、仏教はゴータマ・シッダールタ(釈迦)で、儒教は孔子だから人間だろ。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教は唯一神で”^{イコール}璃寛。じゃあ、神話に神がたくさん出てるのは全部作り話なのか?」

日本神話やギリシャ神話などには神様の子供がたくさんいるよな? 天皇陛下だつて神の子孫だつていうし。まあ、本当かどうかは本人達にもわからないだらうけど。家系図が残つていたとしても、本当である保証はないんだしな。

「神話の神々ですか？あれは私の使徒や神子、巫女ですよ」

「ひと？みことみこと別なのか？」

「そうですね……まず、神の位から説明しましょうか。最高神であるシャモア様を頂点として、その下に弟君である冥界の神ああ、名前は本人に聞いてくださいね。神にとつて名は重要ですから、他人の口から教えるような事があつてはなりません。よく覚えておいてください」

何か物凄く大切な事のようだから、俺は黙つて頷いた。

「そしてその下に我々“世界の管理者”がきます。生きている年数が天と地ほど違つても、我々の地位は同等です。一つの世界に一人の神…………本当は“一柱”が正しいのですが、元が神ではないのでこひ呼びます…………が決まりですから、神の中では我々が最下位となります。ここまではいいですか？」

「ああ」

「[.]から言つ事はシャモア様と冥界の神には当てはまらない事がほとんどです。その事を頭に入れておいてください」

「わかった」

これが学校の授業とかだつたら即寝るのだが、璃寛が真剣に話しているのがわかつたから大人しく聞いていた。俺にも十二分に関係する事だし。

「神の能力では命を生み出す事はできない、と“空の神殿”で言いましたよね。ですが、能力をあげたりする事はできるのです。使徒や神子、巫女はそういう者達の事です。地位は使徒が上、神子や巫女が続き、その下に人間などの生き物がきます」

璃寛は一度言葉を切り、頭の中で整理するように間を開けた。

「生き物に付属させる事ができる能力としては例えば……何等かの才能や記憶力、身体強化など。その代表格として不老不死が挙げられます。というか、これが基準となります」

「(+)まで理解できたか、といつ視線を感じたので俺は領き返した。

「我々は神ですから、当然不老不死です。しかし、自分は死なのに親しい人が変わつてゆく。散つてゆく。中には発狂寸前までいた神もいました。それに、神の仕事はとても一人ではできないほど忙しく……」

「ちょっと待て。する事はないって言つてなかつたか?」

「ええ、ありませんよ。私がいい例です。その事も話しますから、聞いてください」

俺は璃寛の言葉に疑問符を大量に浮かべながらも、一応頷いた。

「まあ、そういう訳ですから、神の友及び部下のよつな者が必要になつたんです。こうしてできたのが“使徒”。不老で“空の神殿”へ行く事ができる能力を与えられた者です。所謂天使のようなものだと思ってください。そして、不老不死ではありませんが何等かの能力を与えた“神のお気に入り”。それが“神子”及び“巫

女”です。違いは性別と文字ですね。もしかすると、レー^ゼではまた別の名で呼ばれているかもしれません。あと、神子や巫女は体の何処かに其々『それぞれ』の神を表す紋章があります。私の場合は蓮の花と霧ですね

「霧？霧ってどんな文様なんだろう。小さくて細かい点々か？」

「……って事はつまり、楽したかつたら使徒を増やせとか？」

「はい。そういう事です。勿論、ちやんと選んでくださいね。神に近い能力を与えるという事ですか？」

……面倒な。

「あ、そう言えば忘れるといひました。貴方はこれから“ ウイスター ”と名乗つてくださいね」

「ウイスター？」

「ええ、神名じんめいです。先程神の名は重要だと言つたでしょ？元の名は神にしか名乗つてはいけませんよ。その者が死ぬまで縛られる事になります。……名乗らなければ知られても問題は無いのですが」

「わかった。とにかく、璃寛の神名は？」

「私はありません。強いて言つなら人間達がつけた沢山の名ですかね？千歳さんも増えるかもしれませんよ」

ええ～……それは勘弁。名前が増えるとか面倒臭いしな。

04・美形ハンパレックス（前書き）

わかりにくいくらいな点などがあったら指摘してください。
なまじ裏設定を知っているだけに、作者にしかわらかないといふがあるかもしれません。

04・美形「ノハナレックス

神についてはまだ色々とあつそつだが、その都度聞くとこう事で話を打ち切った。

あとこの外見だが……うん、考えないようにしよう。すこく残念だけど美人な女に見えるとか、へタしたら超絶美形のオカマさんに見えるとか。

……体格が少し良くなつたのが裏目に出たか？まあ、本当に残念な男よりはいいが。

よし、この話は終わ……

「ああ、そういうえば」

璃寛が俺の思考を遮るように口を開いた。

何だろ？。嫌な予感しかしないのだが。

「その髪ですが、切つてもすぐ伸びるので無駄ですよ」

何だコイツエスパーか？切つとと思っていたのをなぜ知つている！神同士は心読めないんじや……やべ、演技もできないんだつた。顔に出てたのか。

「すぐつてびのぐらいだ？」

「一瞬です

うわー、ずっとこの髪型なのかなよ。

俺の髪は腰よりも長く、地球では女人の人でもそろそろいらない長さである。レーゼがどうかは知らないが、きっと一般的ではないだろう。邪魔だし。ある程度余裕のある生活をしていないとできない髪型だ。

「邪魔ならくぐっておけばいいですよ」

癪に障る笑顔だ。他のヤツなら鈍いのかな、とか他意はないのだろうと思うところだが、コイツの場合は確信を持つて言えるな。絶対おもしろがってやがる。

「コイツの性格は演技でないため、神の力は及ばないらしい。忌々しい事だ。」

「髪がすぐ伸びるのは、不老不死と関係あるのか？」

「ありますよ。基本的には髪型も含め、私達の外見は変わりませんから。ただ、千歳さんはまだわかりませんね」

「変わるかもしないのか！？」

ちょっと興奮気味に言つ。

「ええ。神の力は強力で、シャモア様に体を作り替えていただからくてはとても耐えられません。千歳さんが死ぬのを待っていたのはそのためです」

そりだつたのか。……といつ事は、生きている生き物は能力を与える事はできても作り替える事はできないらし。

「そして、作り替えられた体は、その魂と力に釣り合つよつに変化します。現時点では十八くらいのようですが、魂が馴染んできて力が使えるよつになれば、変わる可能性もなくはないでしょ。」

「変わるものと変わるものだ？」

「そうですねえ……年齢が上がつたり下がつたり、といつたといふでしょ。」

下がる事もあるんだな。まあ、人(?) それぞれといつ事が。

しかし、外見年齢が変わるのは有難い。十五歳から十八歳になつた時のように、体格が変わるかもしれないじゃないか。より男らしく。十八じやあ、まだまだ子供だしな。いつそのこと三十とか四十分くらいになつた方が……待てよ。外見年齢が変わるだけで、基本的な容姿は変わらないんだよな。この顔でガタイが良くなられても、見られなくなるだけのような気がする。それに、自分で言うのも何だが、この浮世離れした容姿だ。オッサンになつても若々しいなんて事も……想定できない。

「はあああ

…………

やつぱつ考えないよつにしそや。

璃寛も意地が悪いよな。忘れよつとした途端にこんな話をするなんて。

とりあえず、俺はこの世界 レーゼについて知らなければ
ならない。神が自分の世界について何もわからないなんて間抜けす
ぎる。いや、この場合仕方ないのだが、俺だったら本当に神なのか
疑うな。

と、いうわけで、まずは情報収集から。

確か、レーゼはできてからまだ九十年。たったこれだけの年数で
どれだけの生物が存在するのか、全く想像できない。

シャモアには“九十年は長い”みたいな事を言った（思った）が、
それはあくまで“アーノスの人間”基準の話だ。レーゼの人間はも
つと長寿かもしれないし、人間自体存在しない可能性もある。何よ
り、“生命の進化の過程”からすれば九十年なんてほんの一瞬だ。

だつて、なあ？アーノスなんて始めは何もなかつたんだ。それか
ら気が遠くなるほど長い年月をかけて、今がある。人間が誕生して
からよりも、その前の方がずっと長いんだ。

それに比べたら、たつた九十年。

アーノスの人間なら、まだ生きている人がチラホラいる程度の時
間だ。九十年間神の不在による災害が起こっていると考えると長い
が、世界としてはまだ目を開ける事さえままならないヒヨックである。
シャモアの話からして何らかの知的生物はいるのだろうが、ど
の程度発達しているのかは甚だ疑問である。

「なあ、璃寛」

「何でしじう？」

考え込んでいた俺を黙つて見ていた璃寛は、すぐに反応した。

「少し気になつたんだが、アーノスはできた当初宇宙しかなかつたんだよな？」

「ええ、そうでしたね」

「そこから様々な生命が誕生するまで相当な年月がかかつたはずだ。なのに、レーゼはたつた九十年で空氣がある。水や土があつて、植物が存在する。恐らく動物や知的生物も。……なぜなんだ？」

そう、明らかに成長速度が違ひすぎる。これは“空の神殿”でも思つた事だつた。

「そうですねえ。……まず、世界といつもの無数にあります。全てを把握しているのはシャモア様か冥界の神……後は神になつたのが早い方々でしょうか。私は七十くらいしか知りません」

世界はそんなにあつたのか。それはシャモア一人で管理できなくなつても無理はない。

「それらの世界は全て二つとない異なるものですが、いくつかに分類する事ができます。例えば“魔術の世界”、“科学の世界”、“自然の世界”といったように。そしてアーノスは、“進化の世界”と言われています」

進化？ちょっと意外だ。科学かと思つたんだが。……まあ、あつ

と“科学の世界”はSFとかにあるような感じなんだな。アンドロイドとか空飛ぶ車とかタイムマシンとか。

“進化の世界”的特徴は“無”つまり宇宙から長い長い時を経て成長してゆく事です。それ以外の世界は最初からある程度生命があり、その代わり宇宙がなくて進化もそれほどしません

「へえ、宇宙がないのか。じゃあ、太陽とか用は？」

「ただのエネルギー体です」

動く光の塊ってか?変な感じだな。

「ちなみにレーザの分類は何なんだ?」

「まだわかつていません。神がない世界に降りていीのはシャモア様と冥界の神だけですし、の方達はそれどころではありませんでしたから」

それはそれで面白そうだな。そのうち嫌でもわかるだろ?。

さてと。

半ば無理矢理とはいって、引き受けてしまったからにはしつかりとやらなければならない。俺は面倒臭がりで自分から動く事はほとんどないが、やる事はきちんとやるのだ。

まずは話ができるヤツを探すべきか と俺が目線を上に上げた時、十メートルもあるかという巨体が目に入った。

『おお、神よー!』

な、何か叫んでるや。

「あれは……ドラゴンですねえ」

相変わらずのマイペースつぶりで。璃寛さん。

黒い鱗に金の瞳をしたドラゴンは俺達の上に来ると、あの巨体では着陸できないからか人型になった。

……当然美形です、ハイ。

しかし、俺の足元にも及びません。（遠い田）

せめて俺以上の美形がいたら少しは楽になるところのこー。

シャモアのアホ

!!!!

04・美形パンフレックス（後書き）

千歳は自分の恵まれた容姿を嫌がりすぎです。
まあ、それだけの事があつたのですが。

Side Story・神の誕生（前書き）

今回は短めです。

妾にはすぐにわかつた。

体を貫くような衝撃 レーゼに神が生まれたのだと。

隣で寝ていた我が夫、クロムも気付いたよつじや。窺うよつじにて半身を起こしておる。

妾達ドラゴンには、生まれつきレーゼについての知識が備わっておつた。基本的なものだけだが、とても役に立つてゐる。

例えば、レーゼに災害が多いのは神がいないためであるという事。他の種族が知つてあるかはわからんが、何か力の強い者が降り立つたのは感じただろう。もしかすると鈍い人間共は気付いていないかもしけんが 何にせよ待ちに待つた神の誕生である。嬉しくないわけがあるつか。

「クロム、何をしておる」

妾の声に、クロムがこちらを向いた。同種でなければわかりにくいだろうが、その顔には歓喜と困惑が表れておる。

神の降臨がこの上無く嬉しいが、突然の事すぎて頭がついていていられないらしいの。

妾は思わず苦笑した。もう少し早ければ、妾もあんな顔をしていたかもしれないからじや。今は守るべき宝がある。

「早うお迎えに行かんか。他の種族　　特に人間なんぞに先を越されでは、取り返しのつかない事になりかねんぞ」

「あ、ああ、そうじや。中立の立場に居る我らが保護して差し上げねば、いらん事を吹き込まれかねん」

クロムは我に返ると、洞窟を出て飛び去つて行つた。

今、世の中は戦乱で淀んである。

どの種族も、物の奪い合いじや。食べ物であつたり、土地であつたり……私利私欲でないところは褒めるべきなのかもしれないが、争いは争い。妾には不快なものでしかない。

それに、そのうち己の欲のために血を流す者が出てくる事は田に見えておる。生きるために殺しは愚かとしか言いようがないではないか。他人にした事は必ず己に返つてくる。その先には滅びしか待つておらん。

妾達ドラゴンは人型になれる上に魔術も使え、言語も使用するが、

分類上は魔物である。

それは基本型が人型でない事や卵生である事、強さが並大抵ではない事などが理由なのである。しかし、最大の違いは生き方にありますと妾は考えておるのじや。

いわゆる人類と呼ばれる動物は、数え方が“人”であり人型をしておる。一人で行動する事もあるが基本は群れて暮らし、欲が多い。その“欲”が人類と魔物の違いなのじや。

ドラゴンを含め、魔物と呼ばれる類いの生物と人類以外の動物は本能で生きる。食べたい、眠りたい、といった欲しかないのじや。ああ、愛しき者に対する独占欲はあるかもしかれんがな。

だが、人類にはもつとどす黒い欲望がある。

妾にはない感情であるから上手く説明できんが、嫉妬とか羨望と言われるものだろうか。

例えば、妾の前に妾にないもの　　妾以上の力とか、知識とか、宝とか　　を持った者がおるとしよう。妾はそれを羨ましいと思う。が、それで終わりじや。人類なら奪おうとするだろうがの。

欲しいと思うのもまた違うよの。

妾には人類が欲しいがるものがなぜ必要なのか、全く理解できん。妾はただ、静かに暮らせたら良いのじや。目と鼻の先で騒がれると

良こそ迷惑よ。

……ああ、クロムが帰つて来おつたわ。

わあ、我らの神を出迎えねばの。

現在、俺は黒い鱗のドラゴンに乗っている。このドラゴン、名前はクロムといつらしい。聞いたところではつがいのドラゴンと共にレーゼができた当初から生きているとか。色々と聞く事ができそうだ。

ついでに言うと、璃寛はアーノスへ帰つて行つた。部下（使徒）に何の説明もせずに来たとかで、また来るにせよ一端帰るべきだと俺が言ったからだ。

居てくれるのはありがたいんだけどな、俺の世界だから他の奴に頼りっぱなしっていうのもどうかと思うし。

『ウイスター様、あそこです。着きました』

クロムの声に身を乗り出すと、前方に大きな洞窟があつた。ドラゴンに洞窟、うん。ベタだな。

クロムがスッと着地する。ドラゴンってのは以外に揺れないようだな。体が大きいからか？あと、風や寒さは魔法で防いでくれていたみたいだ。聞いてないのに何となくわかるのは、神様だからかな。

神つていつも、現時点での俺の能力は超人的な（神だから当然）身体能力と回復力、無駄に多い（というか無限の）魔力、あとは格下（つまりは神以外）の心が読める事だけだ。生前の俺の能力は使えるはずだから、武道は一通りできるな。

これだけじゃあ、他の神の足元にも及ばない。まあ、神以外なら勝てるだろうというとんでもないチートなのだが。この説明をした後、去り際に璃寛の奴「あ、神に魔法の類いは効きませんからね」なんていう余計な一言を言い放つて行きやがった。

何が余計かつて？

先入観だよ、先入観。正確には「魔法の類いは効かないが、攻撃の意識を持っているもの限定」もしくは「意識して遮断できる」だ。だからクロムの魔法は効いたんだが、最初は先入観からシャットアウトしていたようだ。……寒かった。

クロムの背中から飛び降り、俺は洞窟を凝視した。

クロムのような巨体が入つてもまだ余裕のありそうな入り口だ。こんな都合のいい場所、最初からあつたのだろうか。それとも、自分で作つたのか？

「中へ入りましょう。エルムも待つております故」

俺に気を使つてか、人間の姿になつたクロムが言う。俺は頷き、クロムの案内で洞窟内へ足を踏み入れた。

結論。クロムのつがいとかいうメスのドラゴンは、クロム以上にでかかった。どうやら人間とは違い、メスの方が大きい種族のようだ。

『御初に御目にかかります、エルムと申します。子供がいますので、このままで失礼いたします』

エルムは丁寧に頭を下してきた。……何か日本人みたいだな。きっと俺相手にぐらいしかしないんだろうけど。

「ウイスターだ。長いからウイリアアでいい。敬語も不用だ。クロムもな」

ウイリアアというのは、璃寛がつけた略称だ。女っぽくて抵抗感が物凄くあつたが、ネームセンスのない俺にこれ以上の略称が思い付くはずもなく決定した。また変な誤解を招かなければいいけど。

額ぐ二人（いや、二匹か？一人と一匹？）を見てから、俺はふと気になつた事を口にした。

「子供がいるのか？」

『まだ卵だがの』

敬語をなくした途端、古くさい話し方になつたエルムに戸惑いつつ、へえ、と返した。

『見てみるかえ?』

「いいのか?」

『卵と言えどドラゴン。そう簡単に傷付く事はありますまい。仮に崖から落としたところでも無傷ではないかと』

答えたのはドラゴンに戻ったクロムだった。それに苦笑しつつ（ドラゴンの表情はわからんが、たぶん）、エルムが言つ。

『それでも心配なのが母親なのじゃが……まあ、ウイリア様なら問題ないわ』

何か無駄に厚い信頼に若干顔がひきつるのを感じつつ、お願ひする事にした。

だって、ドラゴンの卵だぞ？きっとこの世界でも早々見られるものじゃないはずだ。ドラゴンだって、間近で見たり乗つたりできてテンション上がりっぱなしだったってのに。

エルムに連れて来られたのは、更に奥の部屋のように広がっている空間だった。その中心に、四つの卵が置かれている。

「ドラゴンの卵って、温める必要がないのか?」

無造作に置かれた卵の大きさに驚きながら、俺は尋ねた。

『妾達は鳥とは違つからね。まだ鱗のしつかりしておらぬ子供のつちは火傷してしまつ。ましてや、卵となると』

『うか、ドラゴンは爬虫類。変温動物なのか。普段は鱗が外の温度差から体を守り、丁度良い体温を保つてゐるに違ひない。』

「じゃあ、見ていろだけなのか？」

『そななるかの。同族である妾達ならば触れないわけでもないが、潰しかねんしの』

それは……俺も同じなのか。崖から落ちても傷一つつかないのに。……というか、俺の場合レーザにあるものは全て素手で潰せると思つていた方がいいか。力の加減は注意しなくては。

四つの卵はそれぞれ違つ色で、赤、青、黄、緑だつた。どれも大きさ以外は普通の卵と変わりなく、そんなに固く見えない。が、エルムが言つなら固いのだろう。大きさは大体五十センチメートルくらいだ。橢円形の一一番長い所が。

「殻の色つて意味あるのか？」

『これは鱗の色じや。赤は火、青は水、黄は土、緑は風のドラゴンであるひづ』

属性に関係あるのか。

「エルムとクロムは？」

『妾は光じゃな』

『私は闇。尤も、鱗の色と属性が一致するのは初めの六頭だけのようじや』

「へえ……って事は。

「今のところハラモンは一頭だけ?」

『そつなるの。主属性のドラゴンが六頭、この子らが孵れば魔術がより発達するであろうよ』

「……どういう事だ?」

あまりにもものを知らない俺に、一頭は嫌な顔一つせず説明してくれた。

それによると。

曰く、魔術の属性は今現在、光と闇しかないのだとか。その理由は、精霊が生まれていないから。

ドラゴンは卵から孵るトマズ、魔力を食らう。そして食べた魔力を体内で変換し、吐き出す。この吐き出されたものが精霊だ。

生まれたばかりの精霊には大した力もないが、周りの精霊と合体したりして力をつけてゆく。これを中位精霊と言つ。また、話せるだけの力をつけた精霊を高位精霊と言つ。

魔術は精靈がいなければ使えない。だから、その属性の精靈がドラゴンによって生み出されなければならぬのだ。

魔術と魔法の違いはここにある。

魔法は精靈を介さず力をふるう事ができる。しかし、大量の魔力を消費する上に生まれ持つた資質も重要だ。そのため、使える種族は僅かしかいない。

魔術は魔術の使えない種族でも力をふるう事ができる。簡単に言えば、魔法を息をするように操れる精靈に力を貸してもらいつつものだ。代価は魔力だが、魔法ほど消費しない。その代わり、精靈に好かれなければ行使できないのだ。

ついでに言つと、魔法は無詠唱。魔術は詠唱有りで、場合によつては魔法陣や魔石のような媒介がいるらしい。魔法では十の属性があるから、ドラゴンも最低十……つまり後四頭は生まれるはず。精靈とドラゴンはかなり密接な関係にあるようだ。

もちろん俺はどちらも使えるはずだけど、まだ体に馴染んでないから無理っぽい。今から楽しみだな。せっかく新しい生をもらつたんだから楽しまないと損だし。

俺はどんな子供が生まれてくるのかと、期待に満ちた目で卵を見つめた。

06・レー・ゼにおける魔術と魔法と人類

エルムとクロムは様々な事を教えてくれた。

まず、レー・ゼには魔術と魔法があり、超能力や鍊金術の類いはない。

魔術と魔法の違いは前にも聞いた通り、力を使うのに精霊を介するかどうかだ。魔術はある程度知恵があれば使えるが、魔法は種族や素質によるところが大きいため行使できる者は少ない。

属性は光、闇、火、水、土、風の主属性と木、氷、雷、無の副属性から成る。精霊は光と闇しか生まれていないため、魔術では今のところ一種類しか使えないというわけだ。

それから、ドラゴンは大きく分けて三種類いるらしい。

飛ぶ事はできないが力の強い地竜。

空を自由に舞う翼竜。

そして精霊を生み出す古代竜。

まだできて百年も経っていないレー・ゼで“古代”というのは変な感じがするが、それだけ強く数が少ないという事だろう。事実、レー・ゼで二頭しかいない。その古代竜の卵が目の前に四個もあるのだ

から、すごい事なんだろうな。一部の人間とかなら金儲けの道具にしそうだ。

ドラゴンは基本的に大人しい……というか他の事には無関心なので、力が強くとも何ら問題はない。ただ、縄張りを侵したりなど、彼らを怒らせる事をしなければの話である。そのうち本当にそんな事がありそうだが、まあ自業自得なので余程の事がない限り放置するにしよう。

レーゼには人間以外にも、人類に分類される生き物が八種族いる。魔人、神人、竜人、獣人、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、妖精だ。それプラス精霊と魔物で、ドラゴンは魔物に分類される。基本型が人型ではないからだろうか。

ドラゴンであるエルムとクロムは、人類の事をそれほど知つてゐるわけではない。人里に下りる事など生まれてから数えるほどしかなく、ずっとこの山で暮らしていたのだ。そのため、申し訳なさそうにしながらも基本的な事だけ教えてくれた。

レーゼにおける人間は、魔術を使えるという点と髪や目の色彩が豊かであるという点以外はアーノスと変わらないらしい。尤も、魔術は全員が使えるというわけでもないようだが。

それから、レーゼには“科学”という言葉が存在しない。レーゼの生き物だつて道具は使うが、魔術や魔法の世界である以上仕方がないのかもしれない。

魔人はコウモリのような黒い羽を持った種族だ。同じく、神人は

白い天使のような羽がある。しかし邪魔なのか、常に出している人はそういないらしい。九種族中最も魔力が高いと言われる両種族は、魔法を行使する事ができる。ただし、魔人は光、神人は闇の属性と相性が悪いようだ。

竜人は九種族中最も力が強く、竜化ができる種族だ。ドラゴンに比べるとまだまだ弱いし長時間の竜化は体への負担が大きいため危険だが、人類としては十分すぎる力である。竜人によく似ているのが獣人で、彼らは獣化する事ができた。他の種族より素早く、五感が鋭いのが特徴だ。どちらの種族も魔力が全くなく、魔法どころか魔術ですら使う事がままならない。

エルフは主に森に住み、尖った耳に銀の髪、緑の目、白い肌。それは対照的に、地下に住み尖った耳、白い髪、赤の目、黒に近い褐色の肌をしたのがダークエルフだ。エルフは植物の、ダークエルフは風の声が聞こえると言われている。本当かどうかは二頭でもわからぬとか。両種族共に人間より魔力は高いが、使用できる魔法はせいぜい一、二属性。三属性も使えた超・エリートである。そう考えると、自分の属性以外も使えるエルムとクロムはすごいんだろうな。

ドワーフは山……特に鉱山付近に住んでいる事が多い。これは彼らが鍛冶に長けているからだ。他のものも作るが、鍛冶に関して右に出る者はいない。ドワーフは鉱物の声を聞き、それらの望む通りに作品を作る。これはエルフやダークエルフと違い、確實に言える事なのだそうだ。男女問わず身長が低く、太くて癖の強い黒か茶色の髪で、酒が大好き。一日のうち大半が物を作るか、酒を飲むかのどちらかだという。魔力は人間より少し少なく、魔術しか使えない。

最後に妖精。彼らは最も精靈に近く、それゆえに媒介さえあれば

詠唱なしで魔術を扱う事ができる。また、魔力量は魔人や神人に劣るもの、全ての属性の魔法に適性がある者も少なくないとか。大体妖精の三分の一ほどがそつらしい。背中に四枚の薄い羽があるが、破れやすいため滅多に出さない。飛ぶ事もできないそれを、では何のために使うのかというと、求愛などで自分の弱い部分をさらす事で信頼をあらわすのだそうだ。基本的に幼い頃は両性で、成人である十六歳くらいには男女どちらかになる。

そうそう。時間はドラゴンにとってどうでもいい事らしく、一日は恐らく一十四時間でだろうという事しかわからなかつた。四季はあるが、明確に分けられている様子もない（ドラゴンがいい加減なだけかもしれないが）。呼び方も春夏秋冬なのか、違うのかすら不明のままだつた。これらは人類に聞くべきと思つ。

驚いたのは月がアーノスよりも一回り大きく、銀色である事だ。エルムとクロムは俺を夜の闇と月の光のようだと讃美称え、むず痒い思いをした。レーゼでは太陽ではなく月を崇めるそうで、俺の外見はその影響だろう。

俺がレーゼへ来てから二ヶ月ほどが過ぎた。

徐々に魂が体に慣れてきたようで、簡単な魔法なは使えるようになつてゐる。魔術については媒介となるものがなかつたため練習していないが、魔法同様基本なら使えるだろう。とはいへ、神の能力から見ればまだまだ基礎の基礎である。

「魔法はコツさえ覚えればあとは簡単じゃからの。妾も昔、よく山を吹つ飛ばしておつたわ」

教えやすいように人型になつていたエルムが豪快に笑う。黙つていればサラサラした白髪の清楚な美人なのだが、動いた途端イメージが崩れる。俺としては人形のような綺麗さより、エルムのような方が好きだが。

「山を吹つ飛ばすつ……」

顔がひきつるのが自分でもわかつた。しかし、俺も一步間違えばそうなつていたのだから笑えない。魔法は魔術に比べると格段に暴走しやすく、これがデメリットでもある。大規模なものは魔術を使つた方が安全なのだとか。

俺は魂と体の関係で、大した力を使う事ができない。それでも半径二十メートルくらいのクレーターができたのだから、全力だつた場合は世界一つ吹き飛びかねないのだ。恐ろしい。

ちなみに、その時練習を見てくれていたクロムによると、俺の魔法は古代竜のものよりも少ない魔力で強力な力を出せるそうだ。魔力の純度が高いから、効率的なのだと。魔法はイメージだから、もちろん小さいものも使える。ただ、意識しなければ強くなりすぎる上に、物凄く魔力がもつたいたい（魔力を食べるクロム的にはこ

れ重要）らしい。

……まあ、こんなのでも神だからな。

レーゼ最強である古代竜に今現在でも勝てるとか普通なんだ、きっと。

というか、そもそも俺にダメージを与える事ができない。そして、指一本で岩を碎ける力だ。……力加減を間違えれば大惨事になる。本当に。神の能力の中に、力の制御が入っていたのはうつかり世界を破壊しないようにだらつか。助かつたけど。

案外、神様の欠伸やくしゃみで不測の事態が起るのはどこの神様の実話だつたりして。

そんなこんなで、俺はこの二ヶ月、知識をもらつ事と力の把握に努めていた。

06・レー・ゼにおける魔術と魔法と人類（後書き）

ドラゴンの数え方は「匹」でも「頭」でも良いらしいですが、私は
「頭」を使っています。

あの巨体なので。

「匹」は空想上、「頭」は現実的な感じだつて電子辞書に載つてい
ました。

さて、いよいよ旅立つ口がやつて來た。この世界の神としてもの知らないのは困るから、各種族を回つてみるつもりだ。

それともう一つ。

俺が神になつてから天災の数はいくらか減つたが、なくなつたわけではないようのだ。もちろん、神がいるからといって災害がゼロになるわけじやない。けど、三ヶ月間に十五回近く嵐が、十回ほど洪水や土砂崩れが、五回も地震があつたのだ。以前はそれ以上だつたといふのだから、本当にヤバイ状態だつたに違いない。

やはりシャモアが言つた通り、何か他の手を打つしかないようだ。

といつても、俺にその策は思い付かない。世界を見て回りつつ考え、たまに来るであろう神々に知恵を借りるしかないと思つ。

「もう行くのか？まだたつた三ヶ月ではないか」

クロムが心底残念そう言つ。

「これ、ウイリア様を困らせるでない。妾達が引き留めて良い方ではないじゃね？」

たしなめるエルムに、俺は苦笑しか浮かばない。ドラゴンの神第一主義は徹底しているらしく、何を言つても無駄である事をすでに悟つてゐる。

「もうじや、これを持つて行かんか」

エルムが差し出したのは赤と青の卵だつた。反射的に受け取った俺は、両手で抱いたまま慌てた。

「おー、いいのか？大切な子供だらう？」

「ウイリア様と旅をするなど、我らひとつにはこの上ない幸せよ」

「ドラゴンの知識や力が役立つ事もあるわ。この子にためを思えば、旅をするのも良い経験じゃ」

まあ、エルム達が良いと言つのならこっちに断る理由はない。確かに、ドラゴンが生まれつき持つといつ知識は情報不足の今、すぐ助かるのだ。もちろん、何だつてわかるわけではないが。

「それに、卵を魔法で運べば練習にもなるじゃね？」

……常に風魔法で宙に浮かべると？

「安心せい。卵が割れる事はないゆえ」

そうとわかつても怖いものは怖い。落とした拍子に踏んだりしたら潰れるんだから。

とはいえ、持つて運ぶよりは安全かもしれない。この前ヤシの実みたいに固い木の実を一本の指だけで割ったからな……。

「わかつた。そうする」

俺が頷くと、エルムは満足そうに笑った。

「それにしても、人類なんぞに会う必要はないと思つのじやが……

ため息混じりに言うクロムを見て俺は疑問符を浮かべる。なぜそんなに嫌がるんだろう？

「人類は仲が良いのか悪いのかわからんからの」

エルムが苦笑する。

「ドラゴンは魔物だが、魔物にも人類にも、ましてや特定の人類に味方する事のない中立じや。それは我らが神に仕える誇り高き種族であるゆえ。……まあ、例外はあるが。しかし、人類は違う。争いに巻き込まれるやもしれん。神と知つて悪意から近付く者がおるやもしけん。そういう事じや」

なるほどな。これでも一応、神の端くれなんだから大丈夫だと思うのだが。悪意があつても心の中は丸見えなんだからすぐわかるし、

ちょっとやそっとで傷つくような体じゃない。傷ついてもすぐ治るだろう。大体、魂が体に馴染めば普通の人には見えないはずである。

要するに過保護なのだ。

「俺は元々人間だ。立ち回り方もある程度知ってるし、大丈夫だろうさ」

「ここ最近使う事のなかつた、俺の特技の出番かもしけない。

「ああ、そうだ。俺が神だつて事は言わない方がいいだろ？」「人の意見を聞いておきたいんだが」

「この世界の神の位置づけがよくわからないから、俺には判断しにくい問題だ。そもそも、ずっと神がいなかつたんだから“知識”的あるドラゴン以外の種族が信じるかどうかもあやしいものである。

「そうじやなあ。神官ならば神の降臨に気付いていてもおかしくはないが……なあ、エルム？」

「うむ。ほんどの種族が気付いているのではないか？特に魔人、神人、妖精なんかは魔力に敏感じやからの」

「あ……そういうば、俺はここに来た頃魔力ダダ洩れな状態だったらしい。璃寛も知つていただろうに、全く教えてくれなかつた。今は抑えているが、あの頃なら確かに気付いたかもしれない。何せ俺の魔力量は無限だから。

「魔人、神人、妖精、エルフ、ダークエルフ辺りは魔力の質やあの

時感じた波動なんかで、隠しても無駄やもしれんな。竜人や獣人は力を示せば納得するに違いあるまい。ドワーフは細かい事を気にせんから、嘘か本当かなんて考えんじゃろ？

「人間は？」

「あやつらは鈍いからの……気付いているかはわからん。事実を言つても最初は疑うじやろ？ 確信を得てからは敬意を示すか利用しよう」と考へるか……」

やつぱり、一番危ないのは人間かもしれないな。話を聞いたところ一番数が多いらしいし、考え方も多様なのだろう。

「黙つてて氣付くと思つか？」

「それはまず間違いなく氣付かんな。ごく稀に鋭い奴もいるが、大抵信仰心の強い者じやから問題あるまい？」

それなら、人間には隠す方向で行くか。

「さて、もうそろそろ行くか」

「くれぐれも知性を持たぬ魔物には注意するのじゃぞ！」

「その子を頼むからの。生まれたら名前を付けてやってくれぬか

二人が口々に唱つ。

「わかつた。しばらくしたらまた来るからな

「せうじゅ、やじるれるといひございました。何かあつたらいれを」

クロムが出したのは、紐のついた一つの小さな筒だった。

「まだ渡しておらんかったのか…」

「す、すまぬ。後で聞くから今説教するでない」

ヒルムは無言で筒を奪い、俺に差し出した。

「これは妾らの鱗で作った笛じゃ。吹けばどこへでも駆けつけるゆえ、必ず身につけてくれたもれ。卵か孵ればその子の鱗でも作ればはぐれずすむゆえ、できればそつじてほしい」

「へえ、便利だな。ありがたくもらつておこう」

古代竜を呼ぶような機会などない方が良いのだが、迷子防止はいいかもしない。

「じゃあ、またな！」

「「氣をつけで」」

最後まで過保護だなあ、と笑みを浮かべつつ、俺は断崖絶壁を降り始めた。

今俺は、どこに向かうでもなくのんびりと旅をしている。どの種族がどこに住んでいるか、なんていうのはドラゴンでもわからないから、当てもなく旅するしかないのだ。

便利な事に、神は飲食の必要がない。もちろん食べれないわけではないし、元人間としては手に入るなら食べたいと思う。でも、今のように食料が手に入りにくい状況ではすごく助かる能力（？）である。

「竜人は谷、エルフは森、ダークエルフは地下、ドワーフは山か」
その他の種族は主に平野に住む。当然例外もあるだろうから、一概には言えないが。

「何にせよ、川の近くだろうな」

アイノス
地球の歴史でも黄河文明しかり、インダス文明しかり、人類は川の側で栄える傾向がある。更に言えば、山や森のように木の実、動物といった食料のある場所の側がいいかも知れない。

まあ、何ヶ月も彷徨つたところで死なないのだからかまわないのだが。

ああでも、時間をかけすぎるとレーザから生き物がいなくなるかもしれない。災害程度で世界が滅びる事はないが、生き物はさすが

に無理だ。今の俺の力で守つてやれることは思えないし、できるだけ
急ぐとしよう。

「どうすれば安定するんだろうな。お前、知ってるか?」

宙に浮かぶ濃い赤と青の卵が小さく波打ったように見えたのは、
俺の錯覚なのだろうか。

07・旅立ち（後書き）

ドラゴンが人型の時は「人」で数える事にします。

クロムは魔物に氣を付けるように言つたが、正直知性のない魔物など俺の敵ではなかつた。元々武道を習つていたためある程度は戦えるし、ちょっとは魔法だつて使えるのだ。卵を浮かせる風魔法が乱れる事もない。

知性のある魔物の場合は、出会つても襲いかかって来る事はなかつた。本能的に神だとわかるらしく、むしろ物凄く友好的に接してくれる。魔物でも神は敬う対象なんだなあ、と妙に感心した瞬間であつた。

「……」
「どうしてこのへりで孵るんだろうな」というか、人間より賢いんじゃないだろうか。ドラゴンもそうだが、魔物なんて呼んでいたら失礼な気がする。ビチャウかといふと、聖獸とか神獸だと思つ。

「ドラゴンってどのへりで孵るんだろうな」

俺は卵をポンポンと叩きながらつぶやく。もちろん、潰さないように細心の注意を払つた上で、だ。直接触るのも危ないから、卵を持つ時は薄く風の膜を纏うようにしている。

「……あ、よく考えたら、村とかを見つけた場合卵どうじよつか

まさか宙に浮かせたまま中へ入るわけにはいかないだろう。地竜や翼竜のドラゴンの卵でさえめずらしげはずなのに、古代竜の卵なんて人の目にさらすのは危険すぎる。一番良いのは卵が孵つて人型

をとつてくれる事だが……さすがにそつ都合良くなればずがない。

「つて、ええー？」

ひびの入っている卵を見て、俺は思わず後ずさった。

俺が叩いたせいか？それともまさか、今心の中で思つた事が現実になつたのか……？

前者が圧倒的に有力だが、力の加減はきちんとできていたはずだ。いくら馬鹿力でも、何でもかんでも壊すような馬鹿じやない。頑丈な卵だから、余程気を抜かない限りは潰すわけがないのだ。

ではやはり、後者……。

パリッ……

かすかに音がして、俺は青い方の卵を覗き込んだ。最悪な事態は回避されたようだ。あの一頭の信頼を裏切るのは申し訳なさすぎる。尤も、二頭ならばどんなに大変な事でも笑つて許しそうな気がして、違う意味ですごく怖いのだが。

殻が少し動いているが、やはり固いのか小さな穴は広がりそうにない。俺は人差し指でコン、と叩いた。

バリン。

いや、バリンって。そこはパリンなんじや。

とにかく先程よりも大きな音を立てて、卵が真っ一つに割れた。
崖から落としても割れない卵なのに……我ながら恐ろしい力である。

『ふえつ、な、何！？』

中から出て来たのは卵と同じ、深い青色の鱗をしたドラゴンだった。両親と同じ金色の瞳なのは、ドラゴンの特徴なのだろうか。小さな体に丸い瞳が何ともかわいらしい。

「お前、自分が何かわかるか？」

『何つて……ドラゴン？あれ、何でわかるのかな』

ドラゴンは前足を上げたり、しつぽを動かしたりして自分の体を確かめたりしている。

……普通生まれてすぐの生き物って、こんな仕草をするだろうか。いくら最初からたくさん知識があるて、賢いドラゴンでもおかしくはないか？

「なあ、もしかして、前世の記憶とかあるか？」

『えつ、何でわかるの！？』

やつぱりか。

「転生者だな。どんな世界にいたんだ？」

青いドラゴンの話によると、^{アーノス}地球によく似た世界だったようだ。ただ、もう少し科学が発達していて、戦争が当たり前のよう^{アーノス}に起^{アーノス}つている。^{アーノス}地球ほど平和な世界はめずらしいのかもしない。

いや、^{アーノス}地球だって平和と言つていいか。日本が特別平和だつただけで、戦争やテロはあつた。犯罪だつてしまつちゅう起^{アーノス}るし、食べ物がなくて餓死する人々もいたのだ。他の世界に比べれば平和かもしれないが、平和な世界だと^{アーノス}言い切る事はできない。

それはともかく、^{アーノス}地球と変わらない世界なら価値観もそれほど変わらないだろう。気が樂でいいかもしない。

『そりいえば、転生がどうとか聞いた気がするなあ』

何て適當な。まあ、俺も神なんていうとんでもないものでなければ、真面目に聞かなかつたかもしぬないが。

「お前、名前はどうする？転生前のほうがいいか？」

『うーん……前世と今世は別だから、よかつたらつけでもらえないかな』

「じゃあラピスだな」

『それでラピスラズリ？』

「ああ。宝石の名前だけど、濃い紫みの青もやつぱつんだ。お前の鱗の色にピッタリだね？」

『うん。ピッタリの名前だね。不思議だなあ、真名はラピスラズリなんだよ。偶然かな』

真名？

「真名って何だ？」

『ええっと、ドラゴンだけじゃなく人類とか知性のある魔物にあるものみたいだね。この真名が全く同じ人が一人だけで、それを魂の伴侶つて言うんだって。……あれ、何で知らないの？』

「それは……」

俺は軽く事情を説明した。ドラゴンの神への態度は本能的なものらしいから、転生者であるラピスにもすり込まれているだろうし。

話が終わると、ラピスは納得したように頷いた。なかなか変わったヤツだと思う。普通神なんて言われて頷ける人なんているだろうか。

『神様、なんだあ。どうりです』い力だと思った

「わかるのか？』

『なんとなく。ドラゴンだからなのかな？ドラゴンは神に仕える種族なんだって』

ますます魔物っていうのはおかしいような気がしてきた。“魔物

『悪』みたいなのは偏見だつてわかつてゐるナビ。

『あ、そうだ。この子も助けてあげないと』

ラピスは傍にあつた赤い卵を鼻でつづいた。

「助ける?」

『ドリゴンの卵の殻は固すぎて、自力で割るのは難しいみたい』

子供とはいえドリゴンが割れない卵つて。しかし、やつきの行動
は正しかったんだな。

俺は同じよう、人差し指で軽く叩いた。

バリン。

『ん……あれ?』『やせねん』

赤いドリゴンの第一声はこれだった。……まさか。

『転生者?』

『おお、その通りや。で、別嬪さんのおーちゃんとやつちのドリゴンは誰や?』

若干引きついた笑みを浮かべつつ説明をすると、赤いドリゴンは

目を丸くした。

『ねーちゃん、にーちゃんやつたんかいな』

……そこにつつこむな。

『私、女人だと思つてたんだけど』

ブルータス、お前もか！（違う）

『しかし、神さんなあ。転生前にも会つたけど、変わつたお人ばつかりや。それにしても、三人が三人共転生者つて』

『一柱と二頭が正しいんじや？』

いや、確か璃寛が元々人間だから“人”でもいい、みたいな事を言つていたような？まあ、今は置いておくとして。

「とりあえず、お前は名前どうしたい？」

『ラピースと同じように決めてもらへんかなあ？』

「カーマインってのはどうだ？」

『ええよ～。赤色やな。わしの真名はクリムゾンやねんけど、赤つながりなんかな？』

そういえばクリムゾンレッドであつたな。意図してつけたわけじゃないから何とも返せないが。

「やういえば、俺の名前を書ひてなかつたな。俺の神名はウイスターだ。長いからウイリアとでも呼んでくれ」

ウイスターは藤の事だ。つまり、紫色。本名は千歳で緑色だが、全く接点が見つからない。シャモアはさういつつもつつけたのだろうか。

ついでに、シャモアと璃寛は茶色だったはずだ。今まで意識した事はなかつたが、色の名前ばかりだな。エルムもエルムグリーン、クロムはクロムグリーン、クロムイエロー、クロムオレンジなんていう色があつたはずだし。もし名前を付ける機会があつたら、そろえてみるのも面白いかもしれない。

『わかつた。ウイリアね』

『やつぱり女っぽいな前やなあ。ホンマに男なん? ねーちやんの間違いつやつさ?』

……こつは転生者とはこゝ、本当にアーリアンだつたか。それともただK-Yなだけか?

ちょっと腹が立つたから軽く小突いてやつた。「あ~れ~」「なんてこう声が段々小さくなつていつたが、気にしない事にじよつ。

ん? ラピス、顔が引きつっているだ。

『世界を安定させる方法、なあ。悪いんやけど、何も知らんわ』

さすがドラゴンの子供だと黙つべきか、傷一つなく戻つて来た力
一マインが言った。

『私も』

まあ、俺だつて知らないのだから、大して期待してはいなかつた。
やはり、璃寛辺りに聞くしかないようだ。いつ来るかわからないから、できれば自力で解決したいのだが。

ちなみに、カーマインは前世で中世ヨーロッパの文化を持つ世界
に住んでいたらしい。地球^{アーネス}と同じように魔法などはないし、魔物も
いないとか。違うのは獣人がいる事で、色々な世界があるんだなあ、
と改めて思う。

「ま、とりあえず村でも町でも見つける事だな」

今は大体夏^{アーネス}くらいの気候である。レーゼに来た時は春くらいだつ
たから、地球^{アーネス}と一年の日数は変わらないのかもしれない。

旅立つてからは三週間くらい経つていて。地球換算だから、一週間を七日として、だ。実際どうなのかは、俺にもラピスにもカーマインにもわからない。何せどの世界も時間がバラバラだったのだ。
一週間が六日だったり一年が三百五十五日だったり、微妙にズれて

いる。一日が一十四時間だとこの点を除けば、何一つ一致しなかった。

『ウイリア、思つたんだけど、レーゼつててきてからそんなに経つていなんだよね?』

「ああ。確か九十年だつたな」

『それだけしか経つていなしのなら、生き物の数も少ないんじゃないかな』

“進化”の世界である地球だからこそ少しずつ数が増え、高度な文明が栄えるようになったのかと思つていたのだが、違う世界出身であるラピスがそう言つのならそろそろかもしない。“進化”の世界とちがうでない世界の違いを、きちんと聞いておかなければ。

『それやつたら、当てもなく歩いとつてもしゃあないんとかやつへ。レーゼがどのくらいの瓜さかは知らんけど、効率悪いわ』

確かに、その通りである。俺も薄々感じてたけどな。こればつかりはぢうじよつもなー。

『なあ、ウイリア。わしらアリゴンは、何を食べて生きると懸つ?

「何を……?」

突然の言葉に困惑しながら、ヒルム達と過ごした二ヶ月を振り返

つてみた。……何も食べていなかつた気がする。

『ドラゴンはな、魔力を食べるんや』

魔力とは、命ある者が宿す力である。人類や魔物はもちろん、普通の動物や草木にもある。魔力がなくなる事はすなわち死を意味するほどで、魔術や魔法の使えない竜人や獣人でさえわずかながら宿している。

『せやから、魔力には敏感やねん。初対面のウイリアをなんとなく神様なんかなつて思うくらいには』

それつて相当なんじや？

『でな、自然のものよりも魔物とか人類の方がいっぱい魔力宿しとるみたいやねん。あ、竜人と獣人は別やけど。まあ、竜人は同種の勘みたいなんでなんとなくわかるし、獣人も匂いでわかるから』

「……つまり？」

『私達には人類が多くいる場所がわかるつて事だよ』

予想はしていたが、ドラゴンも大概チートだな。食料を探すためなんだろうが。エルムが卵を持って行けつて言つたのはこれだつたのかも知れないな。

「それは助かる……つて、そいやお前ら何も食つてないよな？」

『そう。せやから食べたいんやけど』

「じゃあ適当に狩つて来る。それとも、生きている方がいいか？」

『「どうちでも変わらんけど、ウイリアのんもらつたらあかんのか?』

神に魔力をねだるドリゴンがいるとは。エルムとクロムなら考えもしなかつただろつ。これは、中身の影響だろつな。

「気持ち悪いからどうして時以外はやめてくれ」

『そつか……それは残念』

俺の魔力は無限で純粋らしいからな。心底残念そうにラピスが言った。

ドリゴンは魔力を食べ、代わりに精霊を吐き出す。聞いてはいたが、すぐ不思議な光景だつた。

『ふう～食つた食つた』

人間臭く（元は人間だが）言つたカーマインの周りを赤い光が飛び交つてゐる。これが下位精霊だ。初めて見えたのはレーゼに来て

一週間後で、幻覚を見ているのかと思ったものだ。精靈はいつ見ても神秘的で美しいと思う。

『あれ、これって風属性の精靈だよね』

赤と青に混じった緑の光を見つけ、ラピスが言った。

「お前らの兄弟も生まれたのかもな」

十中八九そうだろ？

『そっかあ。風属性だから、風に乗つて来たのかな。土は動きそうにないもんね』

いつの間にか白や黒の光も集まつて来て、それは幻想的な光景だつた。もしかするとドラゴンを見た時や魔法を使つた時よりも、異世界だと実感したかもしれない。

『あ、私達の方が少し早かつたんだね』

『あと二頭は弟みたいやな』

一頭が口々に言つたので、俺は首を傾げた。テレパシーのようなものだらつか？

『風がな、運んで来てくれたんよ。兄弟の声を』

カーマインはうれしそうだった。きっと、風属性のドラゴンが魔法を使ったのだろう。生まれてすぐにこんな事ができるのなら、会

える口もむづ遠くないかもしねない。

兄弟、か……。

俺に兄弟はいない。いや、いるのかもしれないが、俺に知る手段はない。何せ、生まれてすぐに捨てられた孤児なのだから。

それでも、俺は恵まれていたと思う。孤児院の人達は親切だし、同じ孤児の子供達とは兄弟同然に育つた。友達もできだし、親友と言える人もいた。だけど、家族はいない。両親はもちろん、本当の意味での兄弟は、いない。

同じ境遇の仲間である孤児院の子供は、やっぱり他人だった。兄弟のように育つても、友達より中が良くても、どこか遠慮があつた。も仕方がない事だ。

『ウイリア、契約せえへん?』

『契約?』

『いいね、それ。しようよ』

一頭口ぐ、契約するとお互いの位置がわかるようになるし、お互に相手を召喚できるらしい。念話もできる。よく小説などにある

主人公と幻獣なんかが結ぶ主従契約に似ているが、レーゼの契約は少し違う。主従のように上下関係はなく、双方の意志を尊重した平等なものだ。合意なしに召喚できないし、一種の約束みたいなものだ。

「神と契約つて……お前らその発想がすごいな」

まともな思考の持ち主ならば、たとえ平等な契約であっても神と交わそななどと思わないに違いない。尤も、俺は敬われてもうれしくないし、対等に扱ってくれる事はありがたいが。

『ダメかなあ？ ドラゴンはレーゼで一番寿命が長いけど、それでも神ほどではないよね？ 大して長い時間でもないと思うんだけど』

ラピスがこちらを窺うように言った。確かに、地球なんかを見ているとかなり長生きするに違いない。神は世界の管理者であり、世界そのものもあるのだから。そしてその地球アーネスでさえ、世界の中ではそんなに古くないのだ。

『それにな、契約は破棄できるんや。双方の合意の上でやけどわしは拒否せえへんし、ラピスもそうや』

カーマインの言葉にラピスが深く頷く。

「契約か……便利そうだし、いいかもな」

強制力はないのだから、損するものがない。プラスにしかならぬいのなら別にかまわないと思う。

『ほんなら、一回人型になつた方がええかな』

そう言つと、カーマインは赤い髪の少年へと変化した。ラピスも同様に、青い髪の少女になる。外見年齢が七歳くらいなのは生まれたばかりだからだろう。将来が楽しみな容姿である。

一人は爪を鋭く変化させて自分の指をスパツと切つた。

「ほい、これなめてな」

「契約には血を交換する必要があるみたい」

……なるほど、よくあるパターンだな。

俺も同じように指を切つて血を交換すると、一人が口を開いた。

【我、光の古代竜エルムと闇の古代竜クロムの子であり、水の古代竜ラピスラズリ】

【同じく、火の古代竜クリムゾン】

【【我らはレーゼの神、ウィスタリアとの契約を望む】】

これは古代語だ。誰に聞いたわけでもないが、なんとなくわかる。

エルムに聞いた話だが、レーゼにおいて古代語とは精霊の言語で、魔術を使う際に必要なものなのだそうだ。古代語と言つても日常的に使つているのは精霊ぐらいしかいない。他の生き物は最初から他の言語を使用していて、古代語は魔術にしか使わないらしいと聞い

ていた。

契約の誓いも古代語なのか。

妙な事に感心しながら、俺は知らないはずの古代語を口にした。

【レーゼの管理者にしてレーゼそのものであるウイスタリアは、ラピスラズリ、クリムゾン、双方との契約を承諾する】

そう言つた瞬間、俺の左腕には青と赤の、ドラゴンの形をした紋章が現れた。同様に、二人の腕に銀の月が現れる。

「これで、契約完了や」

カーマインが満足そうにこいつり笑つて言つた。

近くに人類はいなかつたようで、俺達は五日ほど歩き回った。さすがのドラゴンも、ある程度近付かないとわからないらしい。

二頭が卵から孵つて六日目^{アーネス}の昼、カーマインが前を歩く俺の袖を引いた。

「魔力や。間違ひなく人類やで。魔物ならあんなに群れたりせえへん」

二頭はどちらの体にも慣らすために、姿を一日置きに変えている。丁度ドラゴンの姿をしていたラピスは、素早く人型になつた。

「人類に会つた事がないからどの種族かは特定できないね」

「いや、それだけわかれば十分だ」

俺はまだ魔力を感知できないが、一人にはハッキリと感じられるようだつた。彼ら曰く、極めれば個人の特定もできるはずだと。エルムやクロム辺りはできてもおかしくないかもな。

“空の神殿　《ロアー・ジェ》”に行つた時、璃寛がポロツと「神は全ての世界の能力を使う事ができる」なんて言つていた事がある。そもそも地球上には魔法や超能力などないのに、璃寛は瞬間移動のようなものを使つっていた。“神様だから当たり前”なんて言われればそれてしまいだが……何と言えばいいのだろう。

例えば、レーゼには超能力がないが、俺の知らない異世界には存在するはずだ。行った事のないその世界の力を、俺は時間さえ経て使う事ができる。自分の知っている世界にない力を使うというのは不思議なものだ。璃寛が力を使った時はそういうものだと思ったが、今はなんとなく違和感を感じる。自分が使う立場になつたからそう思うのかもしねえ。

とにかく、俺には万能とまではいかなくとも強大な力があるのだ。今はまだ使えないものが大半だが、こればっかりはどうしようもない。俺にできない事はラピスやカーマインに頼るしかないだろう。ただ、レーゼを安定させる方法が見つかっても自分の力不足でどうにもできない可能性が高い事には若干の焦りを感じていた。

俺は好き好んで神になつたわけじゃない。死んだ後ぐらい、ゆっくりさせてほしいというのが本音だった。しかし、どういう形であれ責任のある立場に立つてしまつたのは確かだ。俺がいなければレーゼだけでなく全ての世界が今以上に危険にさらされるというし、実際レーゼでも地球アイノスでも災害が多くなつているのを身をもつて知つている。そんな状況で駄々をこねるほど、俺は自分勝手になりたくなかつた。

しばらくレーゼで暮らして、それなりにこの世界への愛着がわいてきた。それに、自分に良くしてくれたドリゴン達のいるレーゼを放つておこうとは思わない。

俺は十八歳くらいの外見をしているし、現在進行形で（人間ではありえないスピードで）成長しているようだが、中身はたつた十五歳のガキである。自分で言うのもなんだが、聰い子供だったので人間の醜い部分を散々見たし、どういう事なのか理解できた。だから

かもしだれないが、よく「落ち着いている」だの「大人っぽい」だの言われていた。妙に達観した、ガキらしくないガキだった。

しかし、俺だってまだまだ子供である。日本人の“長い物には巻かれよ”精神でこうなつたが、不満がないわけではない。細かい事を言えばキリがないけれども、一番の不満は“不老不死”だった。俺はまだ神になつたばかりだし、“狂うほどの孤独”とやらがどんなものなのか、本当の意味では理解できない。何より、現実感がなさすぎて神と言われても今一ピンと来ないのだ。

俺が“不老不死”に不満を抱く理由は単純だ。

俺の美学に反するから。ただそれだけ。

俺の美学とは“花は散るからこそ美しい”。つまり、“諸行無常”的考え方である。別に仏教徒だというわけでもないのだが、日本古来の考え方が好きだった。

生きている以上、いつかは死ぬ。だからこそ生きる事が楽しく、辛いのだ。

絶対に死なないとわかっていて、どうして精一杯生きれようか。どうしたつて“死なない”事に対する甘えが出てくる。そうすると、全力で何かをする事も減つて行き、最後には生きながら死んでいるような地獄が待つてているに違いない。恐らく、これは“狂うほどの孤独”に近いものだと思う。そんな人生を、誰が歩みたいと思うだろうか。

世の中汚いものだらけだって知つてゐるくせに、“美学”なんていつもので物事を考える辺り、俺はまだまだ子供なんだろう。

「ウイリア？ どないしたん、ボーッとして」

心配そうに覗き込む一人の子供に、何でもないと苦笑して頭を撫でた。二人共精神年齢は子供ではなく、下手をすれば俺よりも上のはずだが、気持ち良さそうに手を細めた。

「そりいえば、ドラゴンって寿命どれぐらいなんだ？」

「んー、古代竜だと三千年くらいかな？」

「地竜とか翼竜やつたら一千年か……長いねんなあ」

という事は、何事もなければ三千年間会いたい時に会えるというわけか。

俺は結構警戒心が強く、こう見えて人見知りする方だ。こいつらが平気なのは、エルムやクロム同様裏表がないからかもしない。転生者というのもあるだろうが。

村らしき場所までは後一田分くらいの距離があるひじへ、俺は今之内に言つておへべきか、と口を開いた。

「一応、お前らで言つておきたいんだけど」

俺が言つと、一人は先を促すようにひざを見た。

「俺、たぶん演技すると思つたが、顔に出すなよ。」

「演技？」

なぜ、と問われて、どう答えるべきか少し迷つ。

「つーん、俺にとってはお前らが異常なんだけだな。自分の事ながら、初対面で警戒を解くとは」

地球アイノスでは誰にも友や親戚にさえ素を見せなかつたといつ

のに。

「まあ、半分警戒、半分癡つてところだな。その時々によつて変わるだらうが、俺の演技は完璧だから狼狽えるなよ」

俺は全く違う人物になりきる事ができる。一番の特技と言つてい
い。……身に付けた経緯が経緯なので胸を張つて言つ気にはなれな
いが。

俺の様子を見て、何か事情があると悟つたのだろう。一人は何も
言わずに頷いた。

うん、賢い奴と話すのは気が楽で好きだ。

一人に話したのはこっちが素だつて知つておいてほしかったから
だが、言わなくてもわかつてくれたかもしれない。

ヤバイ。前世で信頼できる人がいなかつた身としてはすごく嬉しい。
顔が緩むのを止める事ができなかつた。

……見られてなかつたらいいけど。

とある神様視点です。

新しくできた世界、レーぜに神が生まれたといつ。正確には“神として生まれ変わった”のだが、細かい事は気にしないでもらいたい。

さて、その知らせを聞いて、早速贈り物をしてみた。どうやら、キャリスの奴も同じ事をしたようだ。示しあわせたわけでもないのに、やっぱり考える事が同じだな。

レーぜを管理する事になった、新しい神。どういう人物なのか、今から楽しみである。あそこは今荒れているから、管理するのも大変だろう。立場上力を貸す事はできないが、知恵を貸してやってもいいと思つ。……もし気に入ったならば。

あー、しまったな。

時間の流れが違うてのは面倒な事だ。昼間に来るつもりだったのに、夜中になってしまった。また出直すべきか。しかし、彼がいる場所はここからそう遠くないのだよ。どうやら起こしてしまった

ようだし。

神に選ばれるだけはあるな。まだ魔力はわからないだろ？から、
気配を読んだのだろう。わざわざ消したりしてないしな。

あ、こっちに近付いている？それほど警戒していない様子だし、
私が神だつて事はほぼ確信しているよつだ。あと一つ気配があるが、
片方は覚えのあるものだつた。無事合流したよつだ。

レーぜの神は、神名をウイスタリアといつらしい。それはもうこの世のものとは思えないほどの美形だとか。

後は……何て聞いたかな。まあ、会えばわかるだろ？

結論から言わせてもらつと、ありえないほどの美人だつた。これで男というのが信じられない。外見などは然程気にしていないが、女としては少しくこむ。

木々の間から現れた彼を、まじまじと見てしまつた。ウイスター
アは遠慮がちに言つ。

「え～っと神様、だよな？」

おつと、不羨だつたかな。声も男にしては高く、ますます女の間違いなんぢやないかつて思つてしまつ。絶対に言わなゐが。

「いかにも。お前が新しくレーぜを担当する事になつたウイスター
アだらう？」

「ああ」

私としては美人よりかわいい方が好みだが、まあ美しいものとかきれいなものは嫌いじゃない。とりあえず外見は合格かな？

「あ、ナデシコ様」

ウイスターの後にいた少女が言った。容姿に覚えは全くないが、魂には見覚えがある。

「知り合いなん？」

「私の世界の神様なんだけど……」

少女がちらりとこちらを見た。その顔にはどうしてこうしているのか、という疑問がわかりやすく書かれている。

「お久しぶりです、ナデシコ様」

「ああ、久しぶり。今の名前は何ていうんだ？」

「ラピスです。」うちはカーマイン」

ラピスの言葉に、カーマインがペコッと頭を下げる。

「キャリオのところのやつか」

「はい。キャリオ様とお知り合いなんですか？」

「まあな」

キャリオ 本名はキャリスといつ あいつとは一言で言つには難しい関係だ。親友、とも言えるのかもしけないが、少し違う氣もする。もちろん恋人でもない。

「それはそうと、お前ら一旦外してもうえないか。今回用があるのはこっちなんですね」

ウィスタリアの方に目を向けると、ラピスが心得たように頷いた。カーマインは疑問符を浮かべているが、まあ問題ないだろ？

「初めまして、新入り君。私は木蓮。モクレン 神名はラピスラピスも言つた通り撫ナデ子シコだ」

「千歳だ。神名はしんめい わかつてると思つがウイスタリア。ラピス達にはウイリアと呼ばれている」

ふむ。声もなかなか美しい。

「ラピスのいた世界の神、で間違いないか？」

「ああ。私からの贈り物は気に入ってくれたかい？」

「プレゼント？」

不思議そうに首を傾げる。一々仕草が上品だ。本人はそんなつもりなどないのだろうが。

「ラピスだよ。知らない世界へ飛ばされ、神なんでものにされて、不安だらう。たとえ同じ世界でなくても転生者がいると氣分が違う。カーマインも、きっと同じ理由で送られたのだろうな」

私も始めは苦労したものだ。ほほ無敵状態であつても神としての力なんてほとんど使えないし、味方なんて誰一人いない。ましてや、私のいた世界なんて神を信じる者はいなかつた。否、私を神だと信じる者がいなかつたのだ。人間しかいないから。

「うん、まあそうだな。確かに気が楽だ。無駄に畏まる事もないし」

「ははは、私が選んだ者だからな」

堅苦しいのを選ぶはずがない。

「そういう質問があるんだが、いいか？」

「ん？ そうだな。かまわんぞ。お前は中々面白そうだ」

特に外見と中身（話し方）のギャップがな。……言わないが。

「えーと、まず聞きたいのはレーぜの分類は何なのかなって事だ」

「レーぜの分類？ それなら現時点ではわかっている事を話してもうれないか」

千歳はレーぜについてドラゴンに聞いたらしい話を細かく話して

くれた。魔法などもあるようだが、これは恐らく……

「“種族の世界”だな」

「種族？」

「つまりは多用な種族が住む世界ってわけだ。人間、魔人、天人、竜人、獣人、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、妖精。全部で九種族だな。更に魔物と精霊。これだけあれば確実だろう。私の知っている“種族の世界”は六種族だったし」

分類つてのは一つじゃないから“魔法の世界”とかも含まれる可能性はある。途中で変わったりもするが、現時点では確実に言えるのは“種族の世界”だけだ。

「じゃあ、“進化の世界”ってのは何なんだ？レーゼは宇宙から始まつたわけじゃないから“進化の世界”でないのはわかる。それなら、文化や技術なんかは絶対変わらないのか？」

「ん？璃寛から聞いたのか？“進化の世界”以外の世界は、ある一定程度以上進化しないってだけで変わったりはするぞ。そうでないとつまらないだろう？もちろん退化もありうる。……というか、ある一定程度に達したらそのままキープか退化しかないな」

ちなみに私の世界は“進化の世界”ではない。成長しては退化しその繰り返しだ。

「成程」

「ま、少なくとも国ができるある程度裕福な暮らしができるようにな

はなるだろ？ それから後は私にも、シャモアにも全く予想がつかないな」

転生者などによつて変革がもたらせる事もある。当然の事ながら、その世界の“天才”が鍵となる事も。

「最後に、これが一番聞きたい事なんだが
る方法はないか？」

千歳の質問に、私は氣を引き締めて口を開いた。

世界を安定させレーベ

改稿します

お久しぶりです。紅このはです。

今回、実に5ヶ月もの間放置してしまって申し訳ありません。この度は、「レーぜの神」及び他の作品も全て改稿しようと思います。やはり、いくつもの小説を一度に連載するのは無謀すぎたという事でしょう。もしかすると、いくつかの小説は消すかもしません。

「レーぜの神」は多少手直しする程度で、話が大きく変わるわけではありません。ほとんど誤字脱字の修正と矛盾点の訂正のみです。もし読みたいと思つてくださつている方がいらっしゃれば、お手数おかけしますが、「レーぜの神（改）」の方を登録し直してください。

なお、「レーぜの神（改）」が「レーぜの神」に追いついた時点で「レーぜの神」は削除します。

ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2773q/>

レーゼの神

2011年12月21日17時52分発行